

京極読書新聞 <第77号>

発行日 平成28年4月1日(金)
京極町生涯学習センター湧学館

『京極文芸』の十年



今年度の読書会「京極文芸館」は4月8日(金)夜7時からのスタートです。いつもの「後志の文学」講座ならば連休明けの5月からゆったりと始まるのですが、今年度は読まなければならない冊数が15冊と非常に多く、1回分のロスでももったいない！ということで4月スタートとなりました。まずは、『京極文芸』全15冊の概要紹介です。(湧学館司書/新谷保人)

平成27年度製本教室作品展
『針山和美作品集』 『石橋孝弘詩集』

◆後志の文学講座「京極文芸館」進行予定

読書会	「京極文芸」復刻	針山和美作品
4月 8日(金)	創刊号	「支笏湖」
5月13日(金)	第2～3号	「湖にて」
6月10日(金)	第4～6号	「三郎の手紙」
7月 8日(金)	第7～8号	「女囚の記」
8月12日(金)	第9～10号	「敵機墜落事件」
9月 9日(金)	第11～12号	「重い雪のあとで」
11月11日(金)	第13～14号	「山中にて」*
12月 9日(金)	第15号	「わが幼少期」*

*湧学館オリジナル製本

■後志の文学講座「京極文芸館」/講師：新谷保人

平成28年度は4月8日(金)夜7時からスタート
日 時：月第2週の金曜日(4月～12月の全8回)
19:00～20:00

定員：10名

申込み：4月1日(金)～7日(木)まで
湧学館図書カウンターで受け付けています。

京極読書新聞は
毎月1日発行予定です



京極文芸の十年

1. 小説家・針山和美氏

読書会を始めるとなれば、どうしても創刊号から読まなければなりません。だからこそ、最初のことわっておかなければならないことがひとつ。それは、同人誌『京極文芸』を大きく特徴づける針山和美作品の強烈な個性です。小学校の先生だから…といった予断を持って創刊号の『支笏湖』を読みはじめたりすると大変なことになるでしょう。

針山作品には人間のインモラル（不道德）な面が数多く描かれます。例えば、『京極文芸』に発表された6作品の内、「死体」が登場するのが5作品といった具合。不倫、殺人、裏切り、自殺、なんでもありのもの凄さです。

おそらく、8年前の読書会を始めた頃の私たちなら、『支笏湖』ひとつ読んだだけで「もう勘弁…」となっていたでしょう。それくらい、針山和美という人に理解が至らなかった。けれど、沼田流人を知り、大森光章を知り、現代の佐々木譲まで読んできた今の私たちなら、針山和美の世界はかなり近いものを感じられるのではないかと思います。

私の場合は、第4号の『三郎の手紙』という作品で「おおっ！」となりました。京極の小学校風景が登場する作品ですが、教室や生徒をこういう風に表現するんだ！といたく感心しました。そして、第7号の『女囚の記』で「この人、本物」を確信し、第10号の『敵機墜落事件』が単行本にまとめられた際には、結末が180度がらりとちがう『山中にて』という作品になって再登場したことに腰を抜かしました。とてつもない技量。プロのもの書きです。小学校教師なのだから…といった自粛やためらいが一切ない作家姿勢は凄い一言です。



2. 京極小学校・お話クラブ

『京極文芸』のもうひとつの特徴として、子どもの作品を多くとりあげていることもあげられます。すでに第2号で「京中生徒の読書感想文」を3編とりあげ、続く第3～6号でも京中生「学生作文」を大きくとりあげています。記念の第10号では「京極町児童生徒作品特集」まで組む熱の入れよう。

そして、この子ども作品起用の最大成果は、第14～15号に登場した「京極小学校お話クラブ」ではないでしょうか。実際にそういうクラブが存在していたのかどうかはわかりません。けれど、その「お話」のひとつひとつがとももおもしろい。充分、大人が読むに耐えるレベルなのです。

『王子とひめ』『八時半』『へんな日』『白い馬とカスケ』『ピリーの船』…、タイトルを書き写しているだけでも胸がわくわくします。小学生に、ここまで書ける力をつけさせるのって、教師としても並大抵の実力ではないと感じました。

そのことは別方面からも証明されています。今年に入って、北海道新聞小樽後志版で「読書会」や「製本教室」の話題がとりあげられるにつれて、京極以外の場所からも情報が集まってきます。そのひとつが共和町からプレゼントされた『（共和町立学田小学校）作文年間指導計画』。ガリ版刷り、40ページの冊子ですが、そこには、小学1年生の「4月」から始まって6年生の「3月」まで、毎月の作文指導計画案が事細かくびっしりと書き込まれていたのです。驚きの内容です。学田小学校は針山先生が京極小学校に来る前に勤められていた学校ですが、この年間指導計画案も針山先生がひとりでまとめ書き切ったそう。針山和美氏の「創作」というものにかかる熱い想いがひしひしと伝わってきます。



3. 後志の風土記

『京極文芸』最後の特徴として後志郷土史家の勢揃いをあげたいと思います。前田克己、武井静夫、青木繁、小助川宏といった大御所の名前がずらり並び『京極文芸』。そして、一人一人がいつもの本業とは少し外した位置からものを書いているのがおもしろい。

例えば、武井静夫さん。いつもの「後志の文学」話ではなく、遠縁にあたる漢詩人の話を初登場の第11号に書いたりしています。第15号「かわいい子供は家におけ」というエッセイ、昭和の武井家の様子がほのぼの伝わってくる好作品です。

例えば、前田克己さん。第3号から「後志風土記」シリーズを始めますが、その第1回は、風呂場で蛇に遭遇して気絶してしまった若奥さんの話なのだからびっくりです。なにか、前田先生、定本である余市豆本版『後志風土記』には載せられないスピンオフ話題を意識してこっちに出しているんじゃないかな…とったりします。それくらい面白い。私は第4号の『曲馬纏之碑』の話に深く感じ入ってしまいました。

京極文芸クラブ。会員構成が大きく学校の先生たちで占められていたことが、プラスの面では多彩な書き手を集めることに成功しました。しかし逆の面では、人事異動の多い教員たちの集まりゆえに会員の出入りが頻繁で、それが会費の未納入をどんどん膨らませてしまったとも言えると思います。

京極町からの補助金で食いつないでいくという選択肢もあったと聞きます。ただ、そういう甘えた生き残り方を選ばなかったところに、私などは『京極文芸』同人たちの才気や潔さを逆に感じるのです。創刊号から第15号までの十年を読むことで、そういう先人たちが残してくれた「京極の町に生きる」誇りのようなものを思う存分感じとりたいものです。

▼昭和56年度 京極小学校卒業アルバムより。
後列、左から二人目が針山和美氏。



3/26
(土)

古本 リサイクル市

開催しました!



古本
リサイクル市



3/26(土)春休みイベントを行いました。メインイベントでもある湧学館の除籍本還元と不要本の交換を組み合わせた「古本リサイクル市」では、95名の来場・464冊の本の引き取りがありました。交換用に持ち込まれた本の中には、湧学館でも人気のある作家の文庫本もあり、掘り出し物との出会いもあったのではないのでしょうか。午後からは「大道仮説実験びりりん」という、参加型のイベントを行いました。いろいろな実験を通して目に見えない静電気が見えてきて、大人も子どもも頭をつかう楽しいひとときになりました。

おはなし会



大道仮説実験
びりりん



発行

京極町生涯学習センター湧学館
〒044-0101 京極町字京極158番地1
TEL 0136-42-2700(代表)
FAX 0136-42-2032
E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください
<http://lib-kyogoku.jp>

